

翻訳者による書評

杉原誠四郎（Sugihara Seishiro）氏の著作『外務省の罪を問う』（自由社 2013年）を日本語から英語に翻訳する機会を得たのは、まさに私の誇りとするところである。明治初期に創設されて以来の、外務省の無能ぶりと失態を洩れなく追及した著作として、本書は他に例を見ないものである。外務省は1870年代に、職員の選抜と訓練をするに際して、欧米に倣った外交官試験を導入したが、杉原氏は、このことが皮肉にも、外務省の利益を日本国民の利益より優先させることに専念する外交官という仲間集団を作り出すことになってしまったとして、その実態を描き出している。

外務省の失態の中で最も目を引くのは、米国への「最後通告」の事務処理を誤ったために、帝国海軍の真珠湾攻撃を宣戦布告なき「騙し討ち」にしてしまい、日本にとって後々までの悲劇の種を撒いた事件である。著者は、この事件ばかりでなく、およそ外務省の失態というものが、いかに職員の無能に起因するものか、さらにはそれが、いかに制度的、組織的、そして、職員の採用制度や研修制度に起因したものであるかを解き明かしている。

著者は最近の収賄や横領の事件を分析し、さらに、例えば1990年のクウェート侵攻の際の、邦人救出に際して外務省の取った対応を始めとして、海外で緊急事態が出来たときにいかに対応を誤ってきたかを解明している。

外務省は省内で改革を試みているものの、著者はその改革をも批判し、日本が、最終的に国家利益と国民の利益に合致し、妥当かつ適正な政策を取ることができるようになるよう、外務省のこれまで抱えてきた数々の欠陥を指摘し、これらを是正すべく提案を行っている。

日本の外交政策については、戦後になって膨大な著作が刊行されているが、それは大まかには、1930年代に、陸軍と海軍とが専ら使噓し、その結果、戦争になってしまい、外務省はその間受身に終始していたというイメージで外務省の姿を描いてきた。このような見方は今なお続いており、現職の外交官や元外交官によってそのような認識は固まってしまっているというべきで、彼らは、外務省が戦後になしてきたことについて、おおむね無批判に受け入れている。外務省の内部には、明治時代に導入されて以来まったく変わっていないものもあり、このような時代錯誤の制度にしろ、さらには、外務省の日常の行為に及ぼしているこの組織的、構造的な問題にしろ、ほとんど問題視された形跡がない。しかし、この10年、党派的、政策的対立のおかげで、前代未聞の着服や横領のスキャンダルが発覚し、その結果、外務省の仕事ぶりについて、かつてなかったほどの広汎な検証が細部にわたって行われることになった。

これまでの無批判な見方と訣別し、杉原氏は外務省のこの長期にわたる欠陥を検証する初めてにして卓抜なる著書を上梓した。杉原氏は日米戦争に至る動乱の数十年から、日本が次第に国際社会での立場を再建していく戦後期に至るまでの日本外交の失態と誤りについて舌鋒鋭く描き出した。

杉原氏は、日本の外交史について、以前から広範な著述をしてきた。『外務省の罪を問う』は、個人の資格でまとめた外務省の失敗の年代記ともいうべきもので、「四部作」の第4巻と看做すことができる。この四部作の第1巻は、『総点検・真珠湾50周年報道一何がどこまでわかったか』（ペンネーム杉田誠 森田出版 1992年）（英訳 *Japanese Perspectives on Pearl Harbor: A Critical Review of Japanese Reports on the Fiftieth Anniversary of the Pearl Harbor Attack*, (translated by Theodore McNelly, Asian Research Service, 1995)が出ているが、これは真珠湾攻撃の50周年の年のメディアの関連報道を検証したものである。第2巻は、『日米開戦以降の日本外交の研究』（垂紀書房 1997年）（英訳 *Between Incompetence and Culpability: Assessing the Diplomacy of Japan's Foreign Ministry from Pearl Harbor to Potsdam* (University Press of America, 1997)である。ここでは、杉原氏は、開戦の前夜にワシントンの日本大使館の外交官たちが、どれほどの失態を演じて、帝国海軍の真珠湾攻撃を「騙し討ち」に変えてしまったかの状況を詳細に検証している。この結果、杉原氏は戦後期の日本外務省の行政的、政治的史料を綿密に調査し、外務官僚たちが自己の致命的な過ちをどのように評価し、記録し、隠匿し、そして一部を不承不承ながら認めるに至ったのかの経緯を明確にしたものである。四部作の第3巻は『杉原千畝と日本の外務省—杉原千畝はなぜ外務省を追われたか』（大正出版 1999年）（英訳 *Chiune Sugihara and Japan's Foreign Ministry* (University Press of America, 2001)である。これは、杉原千畝（著者杉原誠四郎とは血縁関係や姻戚関係はない）や中野直也という2人の外務省の職員が、外務省の狭い利益よりも国益を優先しその良心に従って行為したために、外務省への「反抗」として追放されたことにつき、この2人を弁護したものである。著者はこういう話をすべて、四部作の最後の1巻の『外務省の罪を問う』につなぎ合わせて、明治初期以来の外務省の失敗に関して、前例を見ないほどの綿密な検討を加え、将来の改革のために提案を行っている。

杉原氏はまた、日本の教育制度、教育基本法の意義、天皇制、日本の政教分離などについて幅広く執筆している。法学、宗教教育、教育学に関する文献研究に関する研究は、1998年に日本仏教保育協会から褒賞された。杉原氏は2011年に「新しい歴史教科書をつくる会」の会長に就任し（2015年まで）、最近では、複雑な検定手続きを経なければならない中学校教科書の作成に携わった。この教科書は、前述のような複雑かつ論争のある戦時中の外交政策や外交問題に、率直にして原則を守りながら対処している。杉原氏は、日本と米国との間の戦争によってもたらされた悲惨な関係を乗り越えるために身を奉げ、そして、たとえ現代の複雑にして逆巻く狂乱の世界にあっても、かつての敵同士がいかにして真の友人となり同盟を結ぶことができるかを検証しようとしている。

ノーマン フー

翻訳者

2016年11月